

を御所持有、大に御引せ候而御合可被成と被仰候得ば、イヤ／＼態と大キニ引せられ候は曲クもなし、古キ蓋有合テ、取あへず合置は吉と申由被仰候、

〔雍州府志^七土産〕黒漆器^略中 盛抹茶之漆器有數品、是稱棗屋、其茶器之形狀、有似棗形者、故號之、又有稱藤重者、元樽井氏、而南京之漆工也、是漆工羽田氏之類也、至今藤嚴十一代也、第七世人剃髮號

藤重、特爲巧手、自茲後不稱樽井、從倭訓號藤重、是專製中次茶器、其圍五寸餘、高一寸半、徑一寸半、以轆轤削内外、函蓋中分之、故謂中次、其合縫緊密、而不令風濕浸抹茶、斯家又以漆補盛茶磁器之缺、又修罅漏、

象牙^略中 盛碾茶之磁器、用象牙爲蓋、造之人稱蓋挽、

〔茶道筌蹄^四〕同^入茶 塗物之作者

五郎 羽田氏、奈良の法界門の傍に住す、夫ゆへ五郎の作を法界門塗と云、羽田盆ともいふ、珠光時代の棗は、五郎作に限りては杉の木地板目なり、

余參 記三 兩人とも京住紹鷗時代の棗也、余參作は蓋懸り深し、聚光院に余參の没せし日を記しあり、天正十一年癸未四月十一日、

盛阿彌 京住、法名紹甫、太閤より天下一の號を賜ふ、二代目盛阿彌より共蓋あり、三代にて終る、秀次 四代目秀次、利休時代なるが名人也、俗稱林兵衛、

藤重 藤重は姓也、名は藤嚴と云、利休時代也、塗物は本業にあらず、慰みに仕たる也、名人なりし故、關東へ召出されて江戸に住す、其節亂世後にて、破損せし名器の繕ひを被仰付、其賞としてツ

クモの茶入を賜ふ、名物なり、今に藤重の家藏なり、二代目を御袋師となる、子孫今に在り、但し同一代は藤嚴と云、

宗長 關氏 元伯の塗師なり、余參盛阿彌の頃迄は彫銘なり、宗長以後はかき名に成る、